

第3回 釧路湿原 自然再生シンポジウム

ニュースレター

《開・催・報・告》

平成21年3月14日(土)釧路市生涯学習センター大ホールで、釧路湿原自然再生協議会の主催による「第3回釧路湿原自然再生シンポジウム」が開催されました。ラムサール条約についての基調講演、釧路湿原保全・再生についての取組み発表、パネルセッション、パネルディスカッションが行われ、約200名の参加者は自然再生事業についての理解を深めました。

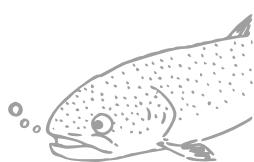
なお、文面は参加者の発言をもとに運営事務局がとりまとめました。

14:00 挨拶 第4期釧路湿原自然再生協議会会长 新庄久志氏

基調講演

「ラムサール条約～これまでと、これから～」

NPO法人日本国際湿地保全連合会長 辻井達一氏



「ラムサール条約への子どもたちの参加」

NGOラムサールセンター事務局長 中村 玲子氏

14:50 釧路湿原保全・再生の取組み発表



「ラムサール条約締約国会議(COP10)」、「KODOMOラムサール in 韓国」での発表内容や感想などについて発表。

15:40 1. 菊地義勝さん 釧路市環境政策課湿地保全主幹
2. 佐藤奈津子さん 北海道釧路湖陵高等学校1年



15:40 16:10 パネルセッション [休憩]

16:10 パネルディスカッション



17:00 終了

開会挨拶



新庄 久志 氏
(釧路湿原自然再生協議会会长)

1948年帯広市生まれ。北海道教育大学釧路校卒業後、1973年に釧路市立博物館に入り、釧路湿原のラムサール登録推進に関わる。現在、釧路国際ウェットランドセンター主任技術委員として、湿地保全に関する地域や国を超えた活動を展開している。第4期釧路湿原自然再生協議会会长

●皆様、こんにちは。きょうは、いわば春のあらしとでもいうような天気の中をお運びいただきまして、どうもありがとうございます。

●釧路湿原の自然再生事業は、釧路川流域の保護と利用という課題を取り組まれた先達の方の課題を受けて取り組みが始まっています、ことでちょうど5年目になります。

●見直しという時期になりましたから、本日、辻井先生、中村玲子さん、菊地さん、佐藤さん、そのほかの方々をお迎えして、これから釧路湿原の自然再生はどんな方向に向かっていくのか、どんなふうにしていくことが求められるのか、大いに皆様と一緒に理解を深めたいと思います。

●どうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

基調講演

■ラムサール条約～これまでと、これから～



●皆さん、こんにちは。今ご紹介いただいた辻井でございます。私は今日、「ラムサール条約～これまでと、これから～」という題でお話をすることにしました。

●ラムサール条約というのは元々、渡り鳥の国際的な保護を一つの重要なテーマとして決められた国際条約です。ところが、渡り鳥だけではなくて、今では極めて広い範囲の問題をそこで討議し、あるいは決定するという会議に変わっています。

●例えば1993年にここ釧路でラムサール条約会議が開かれました。そのときに、稲作の水田ですが、水田も湿地の一つだというテーマで議論があったのですけれども、水田というのは、湿地には違いないが、人工的なものであって、ラムサール条約の本筋のものではない、という考え方方が極めて強かったです。

●しかし、例えば昨年の昌原で開かれた会議のときには、幾つかの国々のNPOが提出した水田決議、つまり、水田というのは非常に重要な湿地の一つの概念であると。水田生態系と言われるものは、湿地の中で大きな部分を占める。特に、アジアを中心とした稲作地帯では、極めて重要な部分を占める。それを守り、どういうふうにラムサール条約でいう湿地の中で位置づけるかというのは、極めて重要な問題である。

●さらには、稲作というのは、極めてたくさん的一种の文化的な儀礼を伴っています。例えば田植えのときには田植えのお祭り、収穫祭的なものが行われたりする。そういうことにあらわされる湿地の文化というのは、極めて重要なものであると。

●湿地の文化という概念というのも、これからもっと大きく私たちは大事にしていかなければならぬのではないかというふうに思われるわけです。これが、「これまでと、これから」というふうに申し上げた、本筋の議論であるというふうに申し上げていいのではないかと思います。

●なぜラムサール会議というのが、渡り鳥を一つの重要なテーマにしたかといいますと、湿地というのは、鳥にとっては重要な飛行場である。鳥というのは国際的に飛ぶわけですけれども、別に国境を意識しているということではなくて、どこでも自由に行くわけです。したがって、当然のことながら国際的になるということになるのですけれども、彼らにとっての殊に大きな湿地というのは、国際空港に相当するのです。

●国際空港の重要な要素としては、大型の水鳥にとっては、長い水面、つまり長い滑走路を準備してあるというような条件です。それで、良質な水がなければならない。これは要するに、航空機の場合ですと、乗員とか、あるいはお客様には、いい水を供給しなければならないです。

●ただしそれに加えて、国際空港だけで意義が十分に果たされるわけではなくて、それをサポートするローカル空港がなければだめではないかということをつけ加えています。

●そういった意味合いで、ラムサール条約は鳥から始まって広がっていった。要するに国際的というのは、1カ所の国際空港、鳥たちにとって1カ所の国際的湿地だけが維持されている、存在するというだけでは済まない



辻井 達一氏

(NPO 法人日本国際湿地保全連合会長)

1931年東京都生まれ。北海道大学大学院農学研究科修了。北海道大学大学院農学部付属植物園長、同大農学部教授、北星学園大学教授を経て1997年より(財)北海道環境財団理事長、2004年よりNPO法人日本国際湿地保全連合会長を務める。

わけで、飛んでいった先の湿地もまた極めて重要なところで、それがなくなつては国際空港の意義が果たせないといふに考えたらいいのではないかと思います。

●そこに、ただ空港だけがあつてはだめなので、各地域の文化が育つ、あるいは文化が維持されるということもまた必要ではないだろうか。そういうふうに変わってきたのだというふうに申し上げれば、わかりやすいのではないかだろうかと思います。

●今画面に出ていますのは、厚岸湖です。なぜ厚岸湖かと申しますと、厚岸湖というのは、それだけで存在するというわけではなくて、例えば上流、つまり厚岸湖に注ぐ水が存在する。それは、皆さんご存じのように、別寒辺牛川という川から流れている。今見ていただいているのは、別寒辺牛川が厚岸湖に注ぐ河口に相当するわけです。その河口に発達したのが、その水を受けた厚岸湖であるということになります。

●さらに、厚岸湖というのは、非常にすぐれたカキを産するところとして知られているわけですけれども、それを人間がうまく使って、いわば文化と技術の結晶だと言つたほうがいいかもしれません。

●さまざまな条件が、厚岸湖周辺の湿原、別寒辺牛湿原もそうですし、厚岸湖周辺の湿地もそうですけれども、そういうものをつくり上げている、あるいは維持しているというふうに考えるべきだと思います。

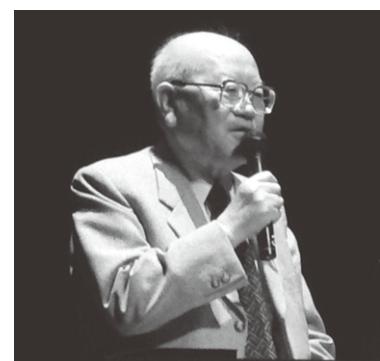
●さらに厚岸湖の水が外洋に出ますと、今度は昆布の収穫できるすぐれた場が存在するということになるわけです。

●国内の湿地について見ても、湿地が単独で存在しているのではなくて、上流からの優れた水の供給を受けなければなりませんし、湖から流れた水が外洋へ向かって、さまざまな影響をもたらすんだろうということを考えなければならない。こういうふうにつながっているということを認識しなければならないのではないかだろうかというふうに思います。

●お手元にラムサール条約の決議、これはパレンシア会議ですか。決議の要約のコピーをお手元にあると思います。先ほどしきりに文化のことを申しましたけれども、既にその当時から湿地の文化、あるいは文化的に見た湿地の意義ということが議論されてきました。

●今回の昌原会議で、私の属している日本国際湿地保全連合では、アジアの湿地に関する文化というのを、もっと見直して、重要なものとして活かさなければならないのではないかという提案をいたしました。

●これもまた、これからの湿地を考える上で非常に重要な部分に相当するのではないかだろうかということを申し上げて、私の最初のお話といたします。どうもありがとうございました。



■ ラムサール条約への子どもたちの参加

基調講演



- こんにちは。中村玲子です。また、このシンポジウムのおかげで私の好きな釧路に帰ってくることができて、大変うれしく思っております。
- 今日お話をしたいのは、ラムサール条約に子供たちがどのように関わってきたか、ラムサールセンターとして子供たちとラムサール条約、ラムサールセンターの活動の中で子供たちがどういう役割を担ってきてくれたかをご紹介したいと思います。
- ラムサールセンターは、1990年に設立したNGOで、ラムサール条約を普及啓発するというのが一つの大きな目標だったのですけれども、その視野の中に、子供たちに直接話かけるという視点は、当初はありませんでした。
- 初めて「子供」というのがキーワードとして上がってきたのは、96年からでした。開発途上地域の子供たち向けの環境教育ビデオを作るという事業があって、その中でラムサール条約や湿地保全のことを普及させる対象として、だれに話をするのが一番いいのか考えたとき、次の世代の地球環境を担う子供たちにわかってもらえるようなものをつくるのが一番いいのではないかという意見が出てきました、メッセージの受け手として子供達がいるということを意識したのです。
- そのような活動の経験から、2002年からラムサールセンターは、アジア湿地ウィークキャンペーンという活動に着手しました。
- それと並行して、日・中・韓子ども湿地交流というイベントを始めました。韓国と中国と日本のラムサール条約登録湿地のそばにいる子供たちを集めて、お互いに日・中・韓の経験交流をしようという行事でした。
- 第1回目の日・中・韓子ども湿地交流を千葉県習志野市の谷津干潟で行いました、言葉の壁はとても大変でしたが、子供たちはあっという間に仲よくなってくれて、言葉はわからなくても、本当に仲よくなつて、一緒に活動して、こういう湿地交流というのは成立するんだということを、私たちはこのときに知ることができました。
- こういう子ども湿地交流の経験を踏まえて、初めてKODOMOラムサールというタイトルで活動したのが、2005年の第9回締約国会議のときです。
- ラムサール条約が開かれるときに、アジアの子供たちをアフリカに連れて行って行ったのが、このKODOMOラムサール：アジア・アフリカ子ども湿地交流です。
- アフリカの子供たちは、プレゼンテーションという形ではなくて、歌を歌ったり、踊ったり、パフォーマンスで自分たちの湿地のことを紹介してくれて、その後、子供たちはグループディスカッションをして、「COP9のための子どもアピール」という宣言を、自分たちでディスカッションして採択したのです。
- そのグループディスカッションの子どもアピールを、COP10の公式オープニングセレモニーのときに、60人の子供たちが開会式に正式に参加することを許されて、さらにその中の16人の子供たちが壇上に上がって、自分が採択した「COP9のための子どもアピール」というのを、政府代表の方たちの前で読み上げました。
- ラムサール条約35年の歴史の中で初めて、次の世代の子供たちが正式にラムサール条約のCOPに参加したという初めての例で、締約国会議の代表の方たちにも大変高く評価され、締約国の代表の人たちに、自分たちがラムサール条約の締約国会議を開いて苦労しているのは何のためだったんだ



中村 玲子氏

(ラムサールセンター事務局長)

出版社勤務を経て1988年4月からフリーライター。1990年ラムサールセンターの創設に関わり現在まで事務局長。ラムサール条約の普及と湿地のワיזユース(賢明な利用)実現のため日本とアジアで活動を展開中。2005年11月に開催された第9回ラムサール条約締約国会議において日本人で初めてラムサール湿地保全賞を受賞。

と。実は次の世代に美しい地球、健全な湿地を残すためであったということに気がついた、といふに評価をされた、大変記念すべき活動となりました。

●アジア・アフリカ子ども湿地交流は、日本の子供たちには余りそのことが伝わっていなかったのです。それで、自分たちがやってきた経験を、今度は日本の子供たちと共有したい。自分たちが決めてきた「COP9のための子どもアピール」を日本でみんなと共有したいという声が上がって、それで始めたのが、このKODOMOラムサールです。

●1年目には4回、KODOMOラムサールを行って、1回目、初めてのKODOMOラムサールを、北海道の濤沸湖で湿地交流をやりました。

●各地域での4回のブロック湿地交流以外に、地域版のKODOMOラムサール琵琶湖、KODOMOラムサール宮島沼、KODOMOラムサール谷津干潟というのをやって、2007年度最後の活動としてやったのが、日本じゅうのラムサール条約湿地の子供たちを集めてやる全国湿地交流でした。

●さらに、昨年の8月、KODOMOラムサール3年事業の日本でやった最後の活動だったのですけれども、アジアの子供たちを招待して、KODOMOラムサール国際湿地交流イン新潟というのを行いました。中国、韓国、ロシア、タイ、インドの子供たちが集まって、COP10へ持っていく最後のメッセージをつくろうということで行いました。

●このときにつくったメッセージが、「湿地がある 命がある ぼくらがつなげて宝になる」というメッセージです。

●このとき、ラムサールCOP10協賛で、世界KODOMOラムサール会議というのを昌原市の主催で、日本からの18人の子供以外に、韓国の子供、9回のラムサール締約国会議が開かれた都市からの子供代表が来て、KODOMOメッセージをCOP10のオープニングのときに披露しました。

●まとめに入りますけれども、このKODOMOラムサール、ラムサールセンターが子供たちとやってきた活動だったのですけれども、大変いろんなことを教わりました。

●大人が子供たちをコントロールしたりするのではなくて、子供たちが自分たちで話し合って、メッセージ委員を決めて、代表者会議をやって、またそれを持って帰つてというようなことをやってつくったのです。

●言葉を紡ぎ出す力みたいなものを子供たちは持っているなということを、私たちはこの活動を通じて思い知らされました。

●実は今年度で地球環境基金の事業はおしまいなのです。私たちも続けたいと思っているのですが、実は子供たちから昨年末、ワープロで打った長い手紙が来て、ぜひKODOMOラムサールを今後も続けてほしいと。

●子供たちの声に押されて、ラムサールセンターはあと最低2年間、今度は湿地の生き物に焦点を合わせたKODOMOバイオダイバシティという活動に進化させて、このKODOMOラムサールを続けていきたいと思っています。

●最後に、お願いですけれども、ラムサール条約の締約国会議に子供たちが参加した最初のバイオニアは釧路湿原で、ぜひ一度、KODOMOラムサールを開催したいと思います。子供たちに一番行ってみたい湿地のアンケートをとると、はみんな釧路に行きたいと言うのです。2年間の間に釧路湿原でKODOMOラムサールを開催したいと思っております。それを最後のお願いにして、お話を最後にしたいと思います。どうもありがとうございました。



釧路湿原保全・再生の取組み発表

「ラムサール条約締約国会議(COP10)」、「KODOMOラムサール in 韓国」での発表内容や感想について

釧路市環境政策課湿地保全主幹

菊地 義勝氏



●司会の方からご紹介のありました菊地と申します。市役所で湿地保全関係の仕事をしております。また、釧路国際ウェットランドセンターの事務局の仕事をしております。

●私も、昨年開催されました第10回ラムサール条約締約国会議に参りてまいりましたので、そのときの会場の模様、周辺の湿地、現地の市民の方々の活動などを見てまいりましたので、写真を交えながらご紹介したいと思います。

●ラムサール条約の正式名称は、「特に」、これから始まります。「水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」、これが正式名称です。1971年、ラムサールという都市で開かれました国際会議で採択された条約です。

●その5年後1980年から第1回会議が開催され、これまで10回開催されております。

●第5回目が、1993年、釧路会議ということです、アジアで最初に開かれたラムサール条約会議として、まだまだ15年前ですから、ご記憶の方もいらっしゃるかと思います。そして、第10回、アジアに再び戻ってきました韓国の昌原で開催されました。

●昌原「チャンウォン」は、釜山からすぐ近くのところに位置します。緯度で言いますと北緯35度から36度くらいのところに位置します。温暖な街でございました。

●こちらが昌原の市街地です。大きなビルもたくさんあって、人口は約50万、面積は、292平方キロメートルということでした。

●これが、ラムサール会議が開かれました昌原のコンベンションセンターです。ホールの部分が2階建てで、釧路の国際交流センターと似たようなつくりになっております。

●正面玄関を入りますと、内部はガラス面で、非常に明るいホールでした。オレンジの服を着た方は市民ボランティアの方で、この会議も釧路会議と同じように、たくさんの市民ボランティアの方々が参加しておりました。そして、白い服に帽子をかぶっているのが、警察の方です。

●会場の中に金属探知器が数カ所あります、警備が厳重でした。その理由は、韓国の李明博大統領すけれども、急遽開会式に出席するということで、警備のレベルが最高までに高められていたということで、このような会場の風景になりました。

●会議が行われた会場は2階にありました。右手のほうがガラス張りですので、大変明るい会場となっておりました。国際交流センターのホールが二つぐらいあるような2階建てのホールの部分です。

●会場のほかに展示ブースがあり、各国、韓国、日本、200ぐらいのブースが設けられておりました。私たちのほうも釧路国際ウェットランドセンターということで、釧路を含めた管内の湿地保全、湿地再生の取り組みについて参加者の方に紹介するために、このようにブースを設けて皆様にアピールしてまいりました。

●ポスターを持ち込みました。管内のエコミュージアムとかの湿原の施設や、JICAとか国際協力をしたときの活動の記録などを広く世界の方々に知っていただるためにこのようなポスターを持ち込んだわけですが、それでも、そのほかに、紙飛行機や折り鶴、パンフレットなどもお配りして、PRしてまいりました。

●会場から離れ、ここにあるのはウポ(牛浦)湿原、昌原の近郊で行われました早朝湿地見学ツアーの模様です。ラムサール会議自体も周辺のイベントも市民ボランティアの参加によって成り立っており、ボランティアの助けをかりてウポ湿原を見学することとなりました。

●ウポという湿地は、沼に牛が来て水を飲んでいる姿がこの湿地に似ているということで、ウポと呼ばれていたそうです。

●この湿地では、カツブリとかアオサギ、シラサギ、ハクチョウなどの鳥が見られるほか、植物ではオニバスとかショウブ、ヒシなど、342種類の動植物が生息する自然生態系を持っていると言われておりました。

●こちらは、ウポの湿地に浮かんでおりました木製の小舟です。伝統的な漁業を行っている漁業者がこの地域におり、経済活動と湿地保全の両立をどうしたらいいのかということで、まだまだ解決は見ていないそうです。

●つぎに注南(ジュナム)貯水池。このジュナム貯水池ですが、先ほどのウポ湿原から直線距離で30キロのところにあります。この湿地には、ラムサールカルチャーセンター、ラムサール記念文化センターという施設が、会議にあわせて建設されました。この施設で地域の市民の方々が湿地を見たり、鳥を観察したり休憩できるような場所とか、図書館なども館内に整備されておりました。

●建物の外は、外でもこのようないしょとした色使いをして、鳥を驚かせないようにという配慮がされておりました。

●ラムサール会議の話は横に置きまして、もう一つ、世界湿地の日のイベントという、昌原で開かれました部分を紹介申し上げます。

●ゴサンとかマドンという地区で湿地見学ツアーとシンポジウムが開催されましたので、簡単に紹介いたします。参加者は、小さいお子さんから家族連れ、お年寄りまで、まるで家族の日曜のピクニックに出るような感じで、このような湿地・湿原見学ツアーに参加されていました。皆さんの服装でわかるとおり、そんなに重装備では来ていないような感じで、気軽に湿原の楽しみを味わっているという感じでした。

●シンポジウムには、250人ぐらいの市民の方が参加いたしました。このシンポジウムの目的は何かということと、ラムサール開催以後、韓国はどのような活動をしていったらいいかということを市民と一緒に考えるシンポジウムとして、アジアで開催されたCOP5のときの会議の後の釧路地域の取り組みについて紹介ということで、私が参加してお話をしました。

●市民の方々は非常に熱心に聞かれまして、特に若い人たちの話に関心があるようで、話の中で標茶高校の水の浄化実験のお話をしたのですが、大変関心があるようで、質問が相次いでおりました。韓国では若い人たち、子供さん方の関心が高いことを肌で感じました。

●釧路管内でも小学校、中学校含めて若い方々が大変たくさん取り組んでいらっしゃいます。ご存じのない方は、釧路湿原自然再生協議会で作成した「きづく わかる まもる」というガイドブックがございます。この中にいろんな取り組みの事例が書いておりますので、参考にしていただければと思います。ご清聴どうもありがとうございます。





釧路湿原保全・再生の取組み発表

北海道釧路湖陵高等学校1年
佐藤 奈津子さん

- 北海道釧路湖陵高校1年佐藤奈津子です。本日は、このような発表の場に参加させていただき、ありがとうございます。
- 私が今までにかかわってきた子供の湿地交流や、先日韓国で行われたラムサール条約締約国会議及びチルドレン・ラムサールCOPに参加したことについてお話ししたいと思います。
- 私は、小さい頃から釧路湿原に足を運んでいて、生物や植物などに興味を持つようになりました、小学校高学年のころから湿地という環境自体に興味を持ち、調べていくようになりました、小5の冬には、韓国で行われました日・中・韓子ども湿地交流、に参加し、中学生になってから、KODOMOラムサールに参加させていただきました。
- KODOMOラムサールの醍醐味とも言えるメッセージづくりは、熱心な議論が交わされ、今でき上がったものを見返すと、一つ一つに思い出が詰まっていて、感慨深いです。また、海外の子供たちもたくさん参加してて価値観、宗教観などが全く違う彼らを交えたことにより、さまざまな角度から深く湿地の未来について考えることができました。
- 全体を通して、KODOMOラムサールに参加できて、とても有意義でした。いろいろな湿地の状況を知ることができましたし、何より国内外で湿地にかかわって活動している子供たちがいるのだということを知れたのが、大きな収穫だと思います。
- KODOMOラムサールに参加した日本の子供たちの中から18名選ばれ、昨年10月、韓国で行われたチルドレン・ラムサールCOPに参加してきました。釧路湿原からは私と鶴居村の後輩が行きました。ここからは、日程順に写真を交えながら、行った活動を紹介します。
- 26日は、日本国内の子供たちの移動日でした。宿泊したエバーグリーンホールというところですが、既に日本以外の国の子供たちが全員そろっていて、深夜にもかかわらず各部屋で大歓迎を受けました。
- 次の日からチルドレン・ラムサールCOPが本格的に始まったのですが、27日はフィールドワークと体験活動をしました。午前中は韓国の伝統的な建造物を見学しに行つたのですが、日本の家屋とともに似ているのです。すごく興味深かったです。
- 午後は、ウボ湿地に行きました。ウボ湿地には小5のときにも行ったことがあったので、どんな変化が見られるのかとても楽しみにしていました。5年前よりも環境整備が進んでおり、ウボエコロジーセンターという施設がCOP10を記念してできていました。
- そして、夕方に参加者全員で韓国の伝統的な手法でのTシャツ染めを行いました。最初全員に真っ白なTシャツが渡されて、それをグループごとに赤、黄色、紫に染めました。
- この日の夜は歓迎パーティーが行われました。日本人参加者はみんなで同じTシャツを着ました。これは、先ほど紹介もありましたが、「湿地がある 命がある ぼくらがつなげて宝になる」と書いてあり、裏にはその英語訳が書かれています。これは、KODOMOラムサールinにいがたのときに子供たちが決めたメッセージです。
- 2日目は、朝から各国の湿地紹介のプレゼンテーションが行われました。発表はすべて英語で、日本の子供たちはみんな必死に通訳さんの言葉に耳を傾けながら発表を開いていました。
- 外国の湿地は日本のものよりも規模が大きく、国土面積の小さい日本との違いを感じました。プレゼンテーションの後は、学んだことをもとに大きな紙にそれぞれの絵をかきました。私のグループは、全員国が違う子たちが集まり、みんなで地球の周りに国旗などをかいて、さまざまな国がラムサール条約でつながっていることを表現しました。
- 午後ですが、COP本会議場であるCECOというコンベンションセンターにCOP10オープニングで行われたKODOMOメッセージのリハーサルをしました。私たちの出番は、大統領のスピーチの後でした。ステージ上に上がって会場を見回すと、大統領を初め各国政府代表、NGO団体、市町村代表の方々、それにたくさんのマスメディアなど、今までに経験したことのない聴衆の数を目の当たりにしました。そこで改めて、今自分は日本という国を背負っているんだという重い責任を実感し、緊張したことを覚えていました。
- 私が発表した文は、「Life is treasure. Wetland is treasure. To continue to protect our treasure is our dream.」。これは、沖縄のときにブロック大会でKODOMOラムサールでつくられたメッセージをもとに作った文章です。そのようなKODOMOラムサールの中でつくられたメッセージを自分が伝えられたということは、とても誇り

だと思っています。

●3日目、チルドレン・ラムサールCOP最終日です。日本人の湿地活動報告プレゼンテーションが行われました。私と、鶴居の後輩の川村さんと一緒に釧路湿原について発表をしました。内容は主に自然再生などのことです。すべて英語での発表でしたので、ちゃんと伝わるかが心配でしたが、無事に終えることができました。

●午後は、ジュナム湿地に行きました。その近辺にたくさん水田や農家があったのでそれを見学しました。これは、カキ農家に行ったときの写真です。水田は、ジュナム湿地に来る鳥たちの休憩所などになるそうで、日本の宮島沼周辺など似ているなと思いました。

●ジュナム湿地の貯水池はとても広く、野鳥の憩いの場になっていました。ここにあるラムサールカルチャーセンターというのがあるのですが、館内には、韓国の湿地についての情報以外に、今までのCOPの記念展示コーナーなどもありました。

●体験を終えて宿泊施設に戻り、チルドレン・ラムサールCOPの修了式と民族衣装パーティーをしました。この夜が最後の交流でした。最初は、楽しい雰囲気だったのですが、終わりに近づき、参加者全員が握手をするときになると、お互い抱き合い、涙しながら、別れを惜しました。

●活動中ずっと支えてくれた現地の方々、ボランティアさんにたくさんお礼を言いました。あるガイドの方が私の手をとって、韓国に来てくれて本当にありがとうとおっしゃっていたのが、とても印象深いです。ここに来てよかったですと強く思いました。

●チルドレン・ラムサールCOPで学んだことはたくさんありますが、やはり一番感じたのは、世界はみんなつながっているのだということです。今日、世界はさまざまな情報網でつながるユビキタス社会です。その中で、生活が便利になり、世界を身近に感じられるようになりました。ですが、私たち子供は、情報を介してしか密接になっていないのが日本の現状です。

●世界じゅうの子供同士の交流ができる機会というのは、まだまだ希少かつ貴重なものだと思います。そんな中でも、今回このような機会を与えてくださったラムサールセンタースタッフの皆様を始めとする大人の方々には、本当に感謝しています。

●印象的なのは、何カ所かフィールドワークで湿地を観察したときのことです。日本の子供たちから、私の湿地と似ているなどの声を聞きました。例えば、ジュナム湿地とその近くの水田を見て宮島沼の子が、宮島沼の周りの水田と同じ役割を持っているんだと言っていたのを覚えています。また、韓国の伝統工芸や農耕文化の中に確かに湿地の存在が息づいており、生活との密接さが垣間見えました。やはりどの国でも、湿地を守っていくことが、文化、伝統を継承していくことにつながるはずだと感じました。

●たくさんの貴重な経験をさせてくれたチルドレン・ラムサールCOPの思い出をこれからも大切に、私も元で今回のような場を通して、もっとさまざまなことを伝えていきたいと思いました。

●ここまで公式のプログラムでしたが、その後も日本の高校生は、2泊3日だけだったのですが、昌原に残り、COP会場での広報活動などのお手伝いをしながら、もう少しいろいろ見学しました。

●今回の活動で、湿地という環境について改めてたくさんことを学ばせていただきました。人と湿地のかかわり、多種多様なワイルド、自然再生の実践、言葉にして言うと難しい気がしますが、つまりは、私たち人間一人一人が湿地の保護に関心を持って日々生活していくことが大事なんだなと思います。それらを感じたこと、学んだことを、そのまま放っておかなず、自分のこれから湿地とのかかわり方の中に生かしていきたいです。

●ほかに考えたのは、これからの釧路湿原と子供たちの関わりについてです。釧路湿原周辺に住んでいる子供たちは、実は湿地と触れ合う機会がとても少ないです。

●私は今、一緒に湿地について考えられる後輩が少ないと悩んでいます。もっと地域ぐるみで、大人も子供も一緒に湿地について考えていく機会が増えるといいと思います。これからの釧路湿原再生は、環境の再生であるとともに、人と湿地の関係の再生でもあってほしいですね。この後パネルディスカッションもあるので、本日シンポジウムにいらしてくださいました皆さんと一緒に考えていくたいと思います。よろしくお願いします。



パネルディスカッション

●コーディネーター：新庄久志 第4期協議会会長

●パネラー：基調講演者、取組み発表者 他



●新庄 それでは、今日のシンポジウムのまとめも含めて、これから幾らか時間をいただきましたので、パネルディスカッションをさせていただこうと思います。

基調講演とそれぞれの経験について報告していただいて4の方々に加え、路湿原国立公園のレンジャーの露木自然保護官も新たにパネラーにお迎えしましたので、二つの基調講演と二つの取り組みの発表を聞かせていただいた、いわば感想みたいなものも含めてコメントをいただけたらと思いますが。

出席者によるディスカッション

●露木 露木です。よろしくお願ひいたします。子供達のラムサールでの取り組みですとか、すごくたくさんの努力がされてきていて、国境を越えて多くの子供たちが集まって話し合っているという取り組みを知り、佐藤さんはそういう中で、鉄路湿原というところを世界に向けて国境を越えて発信しているんだなというのを感じました。また、菊地主幹さんのお話を伺いまして、鉄路湿原というのは、アジアで最初にラムサール条約締約国会議があったということで、アジアの中でも先駆的な取り組みをやっているところだと思うのです。

これからも世界に向けて、発信していく取り組みを、子供達だけではなくて、大人一緒に取組み、充実していくように頑張らなければいけないと感じました。

●新庄 ありがとうございます。この鉄路湿原の自然再生というのは、国内の各地に向けても、世界に向けても発信されているということですが、この自然再生事業の今取り組みをそのようなキーワードで捉えたらいいのかということについても、ディスカッションができたらなと思います。辻井先生が先ほどラムサール条約の流れの中で、水田をキーワードにしてラムサール条約の考え方、湿地保全の考え方方が変わってきたというお話をありましたが、その他に私たちがキーワードとして考えなければならない鉄路湿原、あるいは自然再生、湿原再生のキーワードのようなものはございましょうか。

●辻井 今年の世界湿地の日のテーマは、「上流と下流」というのがキーワード・テーマになっていたのです。作家の倉本聰さんが、以前に「上流の思想・下流の思想」という本を出しているのですが、倉本さんは「上流の思想・下流の思想」の中で、上流というのは損だというようなことを書いてあるわけです。下流からいつも文句を言われるというのです。

川の水というのは上流から下流に流れるわけですから、汚れたとか、上流で水を取ったので下流が少なくなったとか、いろんなクレームが下流からつくというわけです。だけれども、上流の言い分もあるはずだと書いているのです。

この鉄路湿原の場合は、一番上流が屈斜路湖で、いろんな川が流れてきて海へ注ぐわけで、その途中で幾つもの町村を通るわけです。このた

め、上流の思想、下流の思想的なものが出てくる。

多分、今の標語を出したのはヨーロッパの人だと思うのです。国際河川がいっぱいありますから、鉄路どころの騒ぎではないわけです。

アジアだとメコン川。あれは最大の国際河川で、メコン流域委員会というものを設立していますが、これが一番大きな問題としてこれから出てくるのではないだろうかと思います。鉄路でもそうではないかと思うのです。

●新庄 上流と下流という世界湿地の日のキーワードになっている課題が、まさに今の私たちの取り組みの中にも課題の一つとなってますが、その中で、辻井先生のほうから、国際的に見てもそういう課題があるということをいただきましたが、中村さんの子ども湿地とかアジア湿地シンポジウムとかというのは、たしかベトナムや何かでもされていたように記憶していますが。

●中村 ベトナムのホーチミンシティにメコン川の大きな河口があります。メコン川下流域の人たちは、水量の豊富なメコン川がないと生活できない、たくさんの漁民もありますし、ここは稻作地帯ですから、淡水水源としてとても重要なです。上流部のラオスでは、ダムをつくって電気の輸出国になって国を発展させたいと思っているのです。それぞれの国によって使い方の利害があつて大変なのです。メコン流域委員会というのができるけれども、中国は、対話には参加するけれど流域委員会のメンバーにはならないという状態です。それぞれの国の開発計画を立てているし、水を使わないと、その国の経済が成り立たないというわけです。そういうふうに考えると、鉄路湿原は国際河川ではないし、幾つかの県にまたがっているわけでもないので、合意形成をする条件としては、国際河川に比べれば難しくないのではないかという気がします。

●新庄 国境を越えて湿原の保全のことを川の上流と下流で考えるとき、子供たちの役割というのが随分役に立ったような記憶していますが、そのときの子供たちの反応はどうなのですか。

●中村 子供たちは小学生、中学生ぐらいなので、国際紛争あるいは水利用のことについては余り意識がないです。一番子供たちの心をキャッチするのは渡り鳥です。自分の国の鳥と同じ鳥がここにもいるとかということが一番最初に子供たちの気持ちをとらえて、自分の目の前にある湿地が鳥を通じてつながっていると。それが国際協力の大事さみたいなもので、理屈抜きで子供たちの心をとらえる。そういう意味で、ラムサール条約はもともと水鳥の生息地を守るということに焦点が合っていて、国際協力をするときには水鳥という存在はとても重要なのではないかというふうに、今回子供たちの活動を通じて私は思います。

●新庄 鉄路湿原のように国境を跨いでいるわけではないけれども、上流と下流の提携というのが必要になってきたりする。そのときは、ある意味では渡り鳥がキーワードになりするかもしれないし、あるときはその湿原を利用する人たちの共通の利害をどうやって分かち合うかということで、その点では子供たちも率直に、意思疎通が真っすぐ素直にできるかもしれない。しかし、鉄路湿原は、上流と下流が120キロあって、その中



パネルディスカッション



に関係町村が随分たくさん含まれていて、国立公園の管理の中でも苦労されているのではないかと思うのですけれども。

●露木 国立公園の管理をしたり、自然再生事業を進めたりしていく、まだまだつながっていないなというのを感じます。でも、つながる要素はもう既にたくさんあるなと思っています。例えば弟子屈のほうの学校では、屈斜路湖をきれいにするとか、摩周湖をきれいにするとか、そういう清掃活動を学校ぐるみ、または地域ぐるみでやってたりするのです。その活動の中に、釧路湿原というのはそんなに意識されていないけれども、清掃活動することによって、きれいになった水が釧路湿原に流れてくるわけで、そういう活動同士がつながっていく。下流の人達もそういう活動を知るという、つながりというのが、すごく大切になってくるのではないかなど感じています。

●新庄 上流と下流の提携という課題はあるけれども、既にその解決の芽は既にあると。上流の人たちは既にいろんな取り組みをしているし、下流の人たちも取り組みが始まっている。今日パネリストで出席していただいている佐藤さんは鶴居村ですよね。だから、分けるとすれば上流のほうにいらっしゃる。どうですか。そんなことを意識して考えられたことはござりますか。

●佐藤 鶴居村に住んでいて、川というのを特に意識するというのは、実は生活の中では余りないです。総合学習で動物だと植物だとかについては学ぶのですが、釧路湿原って一体何なのとか、何で湿地を守つていかなくてはいけなくて、大切なのかとか、そういうところまでたり着くということは余りないです。だから実際私も、活動を始めるのに湿原というものに意識を持ってから長い時間がたって、今やっとこういう場にも出させていただいて、もう少し長い目で子供たちを見てほしいというか、何かもっと子供たちの興味を引き出せるものがあると、もう少し生活の中で意識していけるのではないかと思います。

●新庄 私たちは釧路湿原の川の上流に住んでいるんだという意識は、何かのきっかけがあって、初めて気づく、それにはもっと長い時間がかかる。以前、釧路の人は余り湿原と直接かかわって生活していないところが、釧路湿原の課題だったりするのですか。

●中村 日本のラムサール条約湿地では、西に行けば行くほど、ずっと昔から伝統的に湿地とかかわり合いながら、その地域が発展してきたというような歴史があると思います。釧路湿原の場合には、深くかかわってきたという歴史が余りなかったのではないかと。むしろ、湿原を利用するためには、湿原でなくさなくてはいけなかっただったことがあったので、かかわり合いの方が違うと思うのです。湿原とかかわることで苦労していらっしゃった方たちは、苦労した相手という印象が残ったかもしれない。逆に、新しいかかわり合い方をつくっていくときに、何も制約とか制限とかがなくて、皆さんが考えて、一番いいという方法をすぐにできる。新しい体制で、みんながすてきなところだと思っていることを土台に始められるということは、強みではないかなという気もします。

●新庄 釧路湿原の場合は、湿原とともに生きるよりも、湿原を湿原でないものに変えて、自分たちの生活の糧にしようと思った、いわば対峙した関係があった。しかし、どんなふうに湿原と私たちがかかわっていったらいいのか、これから的新しいあり方をチャレンジする場所としては、非常にいいフィールドなのではないか。菊地さん、下流のほうに住んでいらっしゃいますが、いかがでしょうか。

●菊地 釧路市街地に住んでいる私たちにとっては、それは上流とかの恩恵というのは普段は感じないところですけれども、こちらの地域でも環境教育のためにエコツアーやっています。釧路でも塘路湖にノロッコ号に乗って行っております。ノロッコ号に乗られて行くのですが、出発点は下流の釧路駅のほうです。また、湖のほう、北のほうからのカヌーの体験ツアーというのもやられています。これは上流から下流に流れてくる。絶えず上流、下流というのは相互に助け合っているんだなというの、ワизユースとして見るとわかるのかなと思っています。そんな意味で今後、湿原は広いですけれども、上流、下流というのも一つのいいポイントで、ワизユースを考えていく上で取り組みの一つの切り口になるのかなと思います。

●新庄 ありがとうございます。ことしの世界湿地の日のテーマが、上流と下流の提携・そのあり方とかというのがキーワードになっていて、まさに今、自然再生事業のこちらが取り組んでいる大きなテーマでもある。最後に、湿原自然再生、これから私たちが進むべき方向、課題について皆さんから一言ずついただきたいなと思うのですが。

●露木 国立公園をより魅力的にしていくためにも、自然再生事業を進めていくためにも、釧路湿原という、国内はもちろん、世界各国から釧路湿原を見るために、またそこにいるタンチョウとかを見るために多くの方たちが来る、すばらしい場所があるのです。その地域の宝・資源を、まだまだ活かし切れていないなと思います、その資源をどうやって活かしていくかということが、これから、国立公園の管理、自然再生のキーにもなってくると思います。

●佐藤 韓国の子供たちというのは、貪欲に湿地について、学ぼうとして始めています。そういう状況を考えると釧路湿原は、知名度も高いし、広いし、学ぶべきことはたくさんあると思うのですけれども、生活にもっとかかわって、市民とか、それこそ今の子供の世代がかかわっていくというのが今はほとんどない。釧路湿原についてもっと真剣に考えていくよう、大人も子供も協力して、そういう環境保護への意識を高められる場がもっと増えるといいなと思います。

●菊地 地球温暖化という切り口からしますと、湿原はそれを防止するための役割を果たしているかというのは異議のないことだと思います。釧路はこれまで、日本で最初の登録湿地として、日本の中で情報発信をパイオニアとしてやってきました。韓国もこれから湿地の大切さを考え、環境関係に非常に力を入れております。また、中国も環境汚染が進行している国で、環境を守るために活動というのは力を入れておりますので、今後は、日本国内だけではなくて、韓国とか中国の方々と連携して、湿地、それから地球の環境を守るために活動をしていくようなネットワークを築けたらいいなと思っています。

●新庄 ありがとうございます。韓国はすぐ隣の国なのです。でも、余り交流がなかったのです。今後は、湿地をキーワードにネットワークをつく





パネルディスカッション

っていくことが、これから自然再生のときに大きな力になるかもしれません。

●中村 湿原の直線化した川を、また蛇行した川に戻すというプロジェクトが釧路湿原で始まった聞いた時、かなり感動しました。釧路湿原だからこれができているのですから、皆さんには、誇りを持っていただきたいと思います。ただ、このようなシンポジウムに参加したことがない方たちで、会場を一杯にすることを、とても大事なことだと思います。子供の活動をやってきて、子供たちをこの会場に連れてくるのはそんなに難しいことではないと思うのです。上流から下流まで、すべての学校から5人ぐらいたず代表を出してもらえば、すぐここがいっぱいになるではないですか。例えば、その代表の子供たちに一度、上流の屈斜路湖から全部歩いてもらう。それで、その経験をもとに、子供自然再生会議をやってもらいたい。

●新庄 ありがとうございます。釧路湿原の上流、中流、下流の子供たちをみんな集めて、実際に今展開している自然再生の現場、釧路湿原の上流から中流、下流がどんなふうになっているか見てもらって、子供たちの自然再生会議というのをやるというのは大きいのではないかでしょうか。非常に温かい、新しい新鮮なご助言をいただきました。今現在釧路湿原は、実は病人なのです。本来であればもっと元気で健康なのだけれども、怪我したり内蔵が悪かったりしているので、その治療に当たっているのですというふうに指摘される方がいました。今日お話しをいただきましたように、私たちの生活に湿原というものの存在を密着させて、そして病んでいる湿原の現状を皆さんにわかっていただいて、どうしたらいいかということを、上流、中流、下流、大人ばかりではなく子供たちと一緒に書き込んでやっていくということが、これから私たちの次のステップに向けて自然再生プロジェクト事業の進んでいく道筋ではないかというご助言をいただきました。

■来場者からの質問・意見など

●来場者(女性) 私の身近なところには仁々志別川と新釧路川があります。5年くらい前にオオハクチョウを見つけまして、写真を撮っています。今、昭和地区ではどんどん住宅が増えました。でも、仁々志別川にはたくさんの野鳥がいます。四季を通して野鳥が本当にたくさんいるのです。そういった野鳥の生態とかそういうのも知りたいのです。野鳥がたくさんいると、図鑑を見なければ名前がわからないことなどがありますので、できるだけ湿原という意味で、守ってほしいという気持ちで、きょうは急いで来ました。よろしくお願ひいたします。

●新庄 ありがとうございます。仁々志別川は釧路湿原の支流の一つですね。そこで日常的に野鳥と一緒に親しんでいて、それを皆さんに紹介したいよ。そういう場も欲しいね。まさに、湿原と人々がつながる道筋の芽がそちらにいらっしゃった。露木さん、うれしいことです。

●露木 ゼビワンドグリンダに登録を。今、募集をしております。この中にも、自分で写真を撮られて、その写真を使ってカレンダーとかを作り職場に飾り写真を見た人が、ここにはこんな動物がいるんだと思って釧路湿原のことを知ってくれるという、そういう活動も登録されているのです。そんな感じで、つながりを大切にしていこうとしている取り組みですので、今ちょうど活動、取り組みを募集中でして、表にもチラシを置いてお

りますので、ぜひご登録いただけたらなと思います。

●来場者(女性) 仁々志別川と新釧路川の合流点付近でミンクがおりました。写真を撮っています。そういった感動もあります。

●新庄 ありがとうございます。実際は市民の方や住民の方で湿原と日常的に接している方はたくさんいらっしゃるので、それをつないでいくというのも、これから私たちの自然再生プロジェクトの仕事なのかもしれません。あと、フロアの方でどなたか、ご感想とか。

●来場者(男性) 先ほど上流、下流ということで皆さんからお話しをいただいて、源流が屈斜路湖ということは皆さん言っておられるのですけれども、終点はどこになるのかということを、皆様一人一人にお聞きしたいと思うのですけれども。

●新庄 答をお願いします。釧路湿原の集水域のスタートは屈斜路湖です。そういうことを考えたときに、下流のときの終点はどこだと考えていらっしゃるのですかというフロアの方のご質問ですが、皆さんに聞きましょう。

●露木 海だと思います。

●佐藤 場所的には海ですけれども、そこにつながる釧路のまちの人たちとかが、大きな意味での下流なのではないかなと思います。

●菊地 私も、海というか、港ですね。釧路市街地を流れている幣舞橋の近辺だと思います。

●中村 なかなか哲学的な質問だなと思って。でも、やっぱり川が海に流れ込むところで、生態系的には汽水がある、海の水と川の水がまじり合うあたりではないかなと思いますけれども。

●男性 わかりました。ありがとうございます。

●新庄 私たちが今考えている上流と下流というのは、水源となっている屈斜路湖、そしてその下流となって、それが海につながるところ、そういう大きな流れを全体で見ましょうという、そんな視点ではないかと思います。



【お問い合わせ先】

釧路湿原自然再生協議会運営事務局

釧路湿原の自然再生に関する詳しい情報については、
右記ホームページをご覧ください。

【所在地】〒085-8551 釧路市幸町10丁目3番地

【TEL】0154-23-1353 【FAX】0154-24-6839

<http://www.kushiro-wetland.jp/>

E-mail:info@kushiro-wetland.jp